

2017 年度研究大会

2017 年度研究大会は、以下の通りである。

- (1) 日時：2017 年 12 月 9 日（土）
- (2) 時間：13 時～18 時
- (3) 場所：埼玉大学教養学部 21 番教室
- (4) 研究大会の進行：司会（望月雅美・吉川巧也）、口頭発表（発表 35 分＋質疑 25 分）

- ① 金善花（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程）
「深い」と“深”の非空間的用法に見られる容器性について」
- ② 國谷光（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程）
「「のだ」を巡って－関係詞としての「の」の役割－」
- ③ 牛雨薇（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程）
「授業中日本語学習のモチベーションを高めるための協働的な授業活動の再考－
学習者の視点から－」
- ④ 梁笑彤（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程）
「無意志自動詞の可能表現に関する研究－中国人日本語学習者の使用状況を中心
に－」

「深い」と“深”の非空間的用法に見られる容器性について

金善花（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程）

日本語の次元形容詞「深い」と中国語の次元形容詞“深”の非空間的用法には、同じ用法も見られれば、違う用法も見られる。例えば、日本語の「深い」には「深い事情、深いわけ」のような用法が見られるが、中国語の“深”には見られない。このような違いが見られる背後には、日本語「深い」と中国語の“深”の意味の捉え方に違いが存在すると考えられる。そこで、本研究では、先行研究を踏まえた上で、「深い」と“深”の非空間的用法に見られる複数の意味を分析し、意味拡張、容器メタファーの視点から「深い」と“深”の空間的・非空間的用法に見られる複数の意味間の関係、容器性に対して対照を行い、非空間的用法に違いが見られる原因、認知プロセスについて考えてみた。

「のだ」を巡って

－関係詞としての「の」の役割－

國谷光（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程）

本研究では、「の」補文の機能や性質を分析しながら「何故 Wh 疑問文では「の」が必要なのか」、「何故「のだ」文ではガノ交替が起こらないのか」という問題について論じる。まず、「の」補文と名詞修飾節が共に連体形を必要とすることに注目し、関係詞節を作る範疇 Rel(ative)が関わっていると考え。この Rel には連体形を認可する素性[+連体形]、被修飾語を要求する素性[+被修飾語]、自身を名詞として振る舞わせる素性[+名詞性]が備わっているとする。続いて、Rel には音形「の」を伴う場合と伴わない場合があり、前者の場合には「の」補文、後者の場合には名詞修飾節や「こと」補文などが作られることを、Rel と「こと」の性質の違いに触れながら示す。更に、日本語の Wh 疑問文において「の」が必要となる理由と、「のだ」文においてガノ交替が起こらない理由を、Rel の素性を用いて分析する。

授業中日本語学習のモチベーションを高めるための協働的な授業活動の再考 ー学習者の視点からー

牛雨薇（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程）

本研究では、日本国内に滞在している第二言語学習者としての中国語話者を対象とする。授業中日本語学習のモチベーションを高めるために、学習者の目線に立って見直し、協働的な授業活動を再考する。さらに、具体的な授業案を提出し、検証したい。

事前調査は2017年11月09日に行った。当日、調査に参加した人数は8人の中国語母語話者である。事前調査の結果に基づいて、協力者が経験された協働学習とただいま実施されているピアリーディング授業を再考し、流れを改めて調整する。そして、毎回授業後、アンケート調査を行い、協力者の考えに参考し、担任の先生と相談しながら研究を進める。最後、授業の録音と個別インタビュー調査を分析し、協力者のモチベーションが上がるかどうかを検証する。

本番は1月9日から、3月23日まで、毎週の木曜日に行う。

無意志自動詞の可能表現に関する研究 ー中国人日本語学習者の使用状況を中心にー

梁笑彤（埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程）

日本語の「開く」、「降る」などの無意志自動詞、特にその可能表現は中国人日本語学習者にとって、習得が難しいとされる1項目である。行ったアンケート調査とインタビューの結果から見ると、中国人日本語学習者は無意志自動詞を使う時、無意志自動詞の基本形を非用するという傾向を明らかにした。例えば、日本語母語話者は「鍵がないので、ドアが開かない」と言うが、中国人日本語学習者は「開く」そのままを使わず、可能形を論じると考え、「開ける」、「開くことができる」などを可能形として使ってしまう。

本研究では、日本語母語話者と対照しながら、中国人日本語学習者の無意志自動詞の可能表現の学習状況を検討し、N1レベルの中国人日本語学習者が無意志自動詞を使う時、どのような傾向があるかをまとめたうえで、不適切な使用を改善し、無意志自動詞の可能表現をどのように習得していくかを明らかにすることを目的とする。